

## 6. 気になる幼児の事例

養護教諭 渡辺 誓代

事例1-① 「T児ちゃん！」

6月26日(木)

5歳児がわくわくワールド(宿泊体験)にむけて、グループでの活動(わくわくワールドごっこ)を始めて3日目のこと。グループ全員で協力しカーペットを畳み、教師のいるところへ運ぶことになった。T児のいる青グループもカーペットを畳もうとしていた。しかし、T児はカーペットの端に腰を下ろし絵本を読んでいた。

Z児 「カーペット畳む!畳むよー!」

青グループみんなに大きな声で言った。青グループのメンバーが集まってきた。T児はすぐには動かず、まだ絵本を読んだ。

Z児 「どいて」

カーペットの端を手を持ってT児に背後から声をかけた。T児は立ち上がってカーペットを一瞬持ち、またしゃがんで絵本を読んだ。

Z児 「X児!畳んで」

うろうろしていたX児は注意され、ようやくカーペットを持った。T児はカーペットの陰に隠れてしまい、Z児はT児に気づかなかった。

V児 「T児ちゃん!」

T児の側でカーペットを持っていたV児が、やや怒ったように声をかけた。T児はすぐカーペットの方を向き、しゃがんだまま下方を持った。

V児 「そこ持たなくていい」

とT児の手を軽く払った。すると、T児は、またしゃがんで本を読み出した。みんなが何とか力を合わせてカーペットを畳んでいる横でT児はずっと絵本を読み続けた。やっと畳み終えて、T児以外の全員で持ち運ぼうとした。L児が無言でT児の方を振り向き、Z児らもT児がいないことに気づいた。

Z児・J児ら 「T児ちゃん!」

みんなはカーペットの端を空けてT児の方へ近寄った。T児はすぐ立ち上がって、空いているカーペットの端を持ち、みんなと一緒に教師のところへ運んだ。

この時、養護教諭はちょうどビデオ撮影をしながら、少し離れて見守っていた。T児はみんなと協力する意識がまだ持っていないのではないかと、思われたため、担任と相談し、T児を保健室に誘い、ビデオと一緒に見ながら振り返ることにした。



事例1-② 「わからなかった」

養護教諭 「T児ちゃん、見てほしいビデオがあるから、一緒に来て」

T児 「うん」

保健室に移動しビデオを一緒に見、メモをしながら良いところを見つけることにした。

養護教諭 「これ、今日の朝ね」

T児 「うん」

養護教諭 「T児ちゃん、どこにいるかわかる？」

T児 「うん、ここ」

養護教諭 「そうだね。何してる？」

T児 「本読んだんや」

養護教諭 「みんなは？青グループの友達は何してる？」

T児 「カーペット畳んどる」

養護教諭 「そうやね。T児ちゃんはなんで一緒に畳まなかったの？」

T児 「わからなかった」

養護教諭 「そうなんや。今、Z児くんにごいてって言われてどいたね」

T児 「うん」

養護教諭 「どいてって言われてどいたのは、Oやね」メモにOを書く「次に、あ、カーペットを畳もうとしたね」

T児 「うん」

養護教諭 「あれ、でもまた絵本読んでるね」

T児 「そうや」

養護教諭 「どうして？」

T児 「どこ持っていいかわからなくなった」

養護教諭 「そうなんや。絵本をよんだのはどうして？」

T児 「絵本、おもしろかったから。ウルトラマンの本やよ」

養護教諭 「そうなん。…あ、また畳もうとしたね。持つところ探したんかな？これはOね」

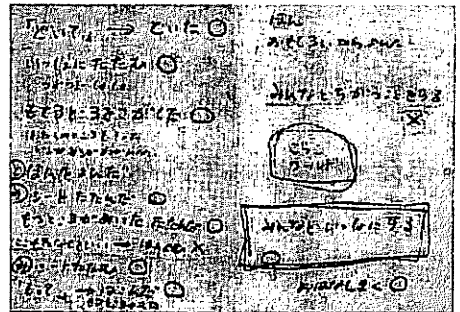
T児 「うん、探した」

養護教諭 「でも、また絵本にいつちゃったね。どこ持つかまたわからなくなった？」

T児 「うん。そう」

養護教諭 「そうか。最後はみんなに言われて、カーペットを運べたんだねえ。これはOね」

T児 「Oいっぱいになった」



養護教諭 「そうやね。でもねえ、絵本を読んじゃったのは×ねえ。わくわくワールドの時には、みんなと違うことをするのは×なんだよ」  
 T児 「え？」  
 養護教諭 「みんなと同じことをするのが○なの」  
 T児 「じゃあ、わくわくワールドの時だけね」  
 養護教諭 「それと、わくわくワールドごっこの時もね」  
 T児 「うん、わかった」  
 養護教諭 「わかって、よかったね。じゃあ、みんなと同じようにするのに、どうしたらいいかな」  
 T児 「じゃあ、3までに着替える」(9:15までに着替えるという意味で、みんなの約束の一つ)  
 養護教諭 「いいねえ。ここに書いておこうか」  
 T児 「うん、書いたらちょうだい」  
 メモを書くと大事そうにポケットにしまった。

### <T児について>

2年保育・5歳女児である。行動が遅く、集団で活動する時に遅れやすいことが入園以来ずっと気になっていた幼児である。自分の思っていたのと違う状況になると動けなくなったり、文字(掲示物や絵本)に目が向いて、指示が通らなかつたりすることが多い。1対1では、とてもうまく会話ができる。

#### (1) T児の思考する姿から

T児とグループの幼児らの様子を見ていると、T児は何も考えず、協力せず、注意が逸れているように見受けられた。今後、このグループの中で協同性を学んで、楽しいわくわくワールドを経験してほしいと願い、T児に気づかせる意図でビデオを見ることにした。すると、その結果、以下のようなT児の思考を知ることができた。

- ・ カーペットを畳むという指示は知っていた
- ・ わからなくなると、絵本などに気が逸れてしまう
- ・ みんなと同じことをするのがよいことで、ちがうことをするのは、よくないと思っていたかった

つまり、T児は全体への指示としてカーペットを畳むことは知っていたが、何が重要でどう行動したらよいのかがわかっていなかった。同じグループの幼児らがみんなですべてで畳んでいることの意味がわかっていなかったのである。わくわくワールドはとても楽しみにしており、活動に参加したくなくて勝手にしていたわけではなかったようだ。絵本を読むということは、具体的に何をすればよいかわからなくなった時に、起こす行動だったようで

ある。

### (2) 幼児の思考を促す教師の援助

T児の思考は、現象だけ見ても想像できないことがある。映像を利用し、このように一緒に振り返って聞くことで、その場では無言だったT児の思考を理解することにつながった。また、振り返りながら、ここは○であると褒めることができ、×の部分はどうしたらよかったか、知らせることができた。集団で同じ目的に向かって行動する時には、このような援助も必要なのではないかと考える。

### (3) 今後に向けて

T児がどうしたらよいかわからず、動けない時には、わかりやすくする援助を試みていく。教師だけでなく、友達の声かけでも動けるように、周囲の幼児も支えていく。



#### 事例2 「怒られると思った」

9月26日(金)

したい遊びが終わり、かたづけの時間になった。4歳児P児がけがをしたと連絡があり、保健室に向かった。幸い軽症のようで、話を聞くことができた。R児がかたづけようとしていた可動式の鉄棒のバーがP児の頭に当たったとのことだったので、周囲の人にR児を連れてくるように頼んだ。

R児 「怒られる？」

とつぶやきながら入ってきた。

養護教諭 「R児くん、P児くんの頭に鉄棒の棒が当たったって聞いたんだけど、知ってる？」

R児 「うん」

うつむきながら話す。

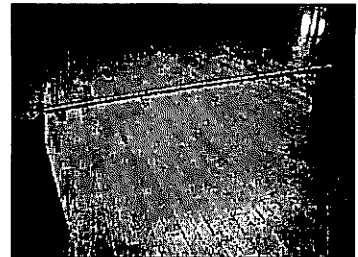
養護教諭 「どんな風に当たったか教えて」

R児 「おれが、持っとして、上げたら当たった」

養護教諭 「そうなんや。ちょっと絵に書くね。こんな風に持ってた？」

R児 「うん」

絵を見ながらうなづいた。



養護教諭 「そうか、本当は持ち上げないで、これくらいにして持つといいよね。それから一人で持たないで、何人かで端の方を持つといいんだよ」

R児 「うん」 絵を見ながら小さい声で言う

養護教諭 「R児くんはかたづけようとしてたんだよね。P児くんは何してたの？」

P児 「かたづけようとしとった」

養護教諭 「え？じゃあ、二人で運んでたの？こんな感じ？」

絵を書き直す。

R児・P児 「そう」

二人とも絵を見ながらうなづいた。

養護教諭 「そうなんや、一人じゃなかったんだ・・・じゃあ、どうして上に上げたのかな？」

R児 「わからん」

養護教諭 「そうか。P児くんは、棒が当たって痛かったんだよね」

P児 「うん」

P児は浮かない顔をしている。R児は黙っている。そこへ、連絡を受けた担任が来室した。お互いに様子を聞き、双方の話に相違はなかったが、R児はあまりしゃべらず、P児も浮かない顔で頭を冷やしていた。

担任 「R児くん、棒が当たった時、どう思った？」

R児 「怒られると思った」

担任 「そうなんや。もしかして、ここに呼ばれたのも怒られると思った？」

R児 「うん。悪いことしたし、怒られると思った」

担任 「今、当たった時の様子を聞きたかったんや。それと、P児くんは棒が当たって痛かったし、こんな時どうしたらいいかも考えてほしかったんや」

養護教諭 「こんなお話を聞くことは、怒ってるんじゃないんだよ。失敗することは誰でもあるよ。R児くんは、P児くんに棒を当ててやろうと思ったんじゃないでしょ？」

R児はうなづいた。その後、R児は教師の話落ち着いた表情で聞き、P児に「ごめんね」と謝った。P児はまだ痛そうな表情だったが「いいよ」と答えた。

## <R児について>

2年保育で4月に入園してきた4歳児・男児である。行動が早く、あまり落ち着きがない。衝動的な面は、逆に積極的でもあり、自分のわかっているかたづけは、友達と取り合ってもすることがある。友達とトラブルになることが時々あり、教師や両親から注意を受けることが多く、注意されそうになると逃げようとしたり、ごまかそうとしたりすることもあった。

### (1) R児の思考する姿から

R児は、かたづけの時に、悪気はなかったが友達にけがをさせてしまい、しまった、と思っただろう。しかし、「しまった」の次に「怒られる」という思考が働き、その場を離れ、謝ることはしなかった。呼ばれて保健室に来た時の様子から、相手に悪かったとか、痛い思いをさせたなという思いよりも「やっぱり怒られる」という思いが強かったことが伺える。その思考はこれまでの経験から、怒られる恐怖感によるものと考えられる。

### (2) 幼児の思考を促す教師の援助

保健室で、けがの状況を聞く時に、相手があるけがでは、善悪や謝罪に目が向きがちである。しかし、まず客観的になり振り返ることが必要で、それが今後のけがの予防にもなる。この事例でも、図を書いて示しながら話を聞くことで、二人とも図を見て少しずつ振り返ることができた。

R児には、「痛い思いをさせて悪かったな」という気持ちを感じ、相手に言葉で謝ってほしいと願ったが、すぐに強制せずR児の思いを聞くことで、R児の思考を知ることができた。「怒られる」と思いながら保健室にきたR児だったが、教師の話聞いて、「怒られること」と「注意されること」の違いが少しは理解できたのか、表情がやや落ち着いたように見えた。

### (3) 今後に向けて

「怒る」ような口調や表情でなく、R児への信頼感を表しながら、話を聞くことが大切である。R児の思いを受け止めた上で、教師の意図を具体的に話し、こんな時には何を考えて、何をしたらいいのか伝える。日頃からの信頼関係を築いておくことも大切である。

友達と息を合わせることができるよう、からだを使いながらつないでいく。

数日前から、Y児、B児、W児の3人がマルチパネで基地をつくって、遊んでいた。今日もY児はテラスで基地を半分ほど完成させていたが、一人だったので「今日はB児さんとW児さんは？」と聞くと、「B児は後で来るし、Q児も仲間や。W児はリレーの修行やって」と答えた。しばらくしてQ児(女児)がやってきて基地に入ったが一度出て、側に積み上げてあるマルチパネに乗った。

養護教諭 「Q児ちゃん、そのマルチパネは組み立てないと危ないよ」

Q児 「・・・じゃあ、こっちにおうち組み立てるし先生手伝って」

男児らは基地をまだつくっていたので、Q児と二人で、Y児らの基地から2メートルほど離れたところに3階建てのおうちを組み立てた。できあがった頃にY児が近づいてきた。

Y児 「つなぐ！」

強引にQ児のおうちを基地の方へ動かそうとした。

Q児 「私がつくったんだよ」

養護教諭 「Q児ちゃんはつなげたいの？」

Q児は首を横に振った。

Y児 「つなげんと、ぶんなぐるぞ」

Y児は手に持っていた新聞紙の剣を振り上げるポーズを見せた。Q児は、また首を振った。

養護教諭 「どうして、Y児くんはつなげたいの？」

Y児 「仲間やし」

養護教諭 「ああ、仲間だからつなげたらいいと思うの」

Y児 「うん」

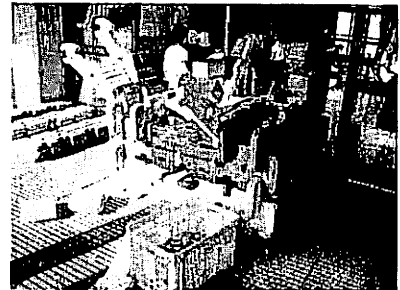
Q児 「いや、だってみんな手伝ってないし。つなげなくても、走っていけばいいよ。近いし」

Y児 「つなぐ！走ったら遅くなる」

二人とも、すぐには譲らなかった。Q児が「じゃんけんしよう」と提案してやってみたがY児が負け、負けたことを認めず「もう一回ね」と言ったり、養護教諭が「走ると遅いか試してみたら」と提案すると、Y児はテラスのずっと奥から走ろうとしてみたり、なかなかみ合わなかった。そのうち、Q児のおうちを二人で押し合いだした。養護教諭は、その場をけんかのような冷たい場にしたい場にはしたくないと思い、時々笑いながら二人のやりとりに関わっていた。途中から基地づくりに参加したU児も話を聞いていた。

養護教諭 「押したら危ないよ。どうしようかねえ」

Q児 「まっすぐにする」



と言って、押し合っただけ傾いたおうちを動かした。それを見ていたU児がマルチパネを手に

U児 「じゃあ、こうしてみたら？」

マルチパネを基地に一つ立てかけた。

養護教諭 「うーん、それは倒れたら危ないね」

Q児は、それを見ておうちを寄せ始め、U児はマルチパネを持ち上げ、橋のようにつなげようとした。

養護教諭 「Q児ちゃん、つないでいいの？」

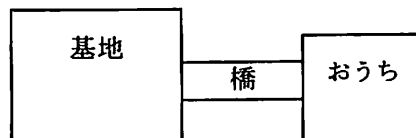
Q児 「うん、いいよ」

Y児は他のところを見ていたので、声をかけた。

養護教諭 「(Y児くん) Q児ちゃん、つないでいいんだって」

Y児 「よし」

その後みんなでおうちと基地をつなげ、Y児は橋の下に敷くマットを探しに行くなど、機敏に動いていた。つながると、みんなで橋を行き来したり、リレーをしているW児を基地の上から大声で応援したりしていた。



### <Y児について>

2年保育で4月に入園してきた4歳児・男児である。友達と協調したり、合わせたりするよりも自分のペースで行動することが多く、着替えや集団活動の時にクラスから離れてしまうこともたびたびあった。2学期になってからは周囲への信頼感が広がったようで、クラスの活動にも参加し落ち着いて話を聞く姿が見られるようになった。11月中旬ころより、それまであまりかかわりのなかった幼児らと一緒に遊ぶようになった。

#### (1) Y児の思考する姿から

マルチパネの基地は、扱いに慣れてきており、基地同士をつないで遊ぶこともあった。「つなぐ!」という言葉から、Y児は当然仲間同士なので、Q児のおうちもつなぐものだと思っていたようだ。しかし、思い通りにならずY児は「ぶんなぐるぞ」という表現で威嚇した。それでもQ児は拒否したので、威嚇することでは通用しない相手がいることを学んだと思われる。次にY児は、何とか別の手段でQ児を変えたいと思ったようだ。じゃんけんをしようとしたり、走ってみようとしたり、これまでよりも根気よく交渉していた。この姿から、Y児はこの場でこの仲間と一緒に遊びたいという思いが強かったと考える。ただ、Y児は相手を変える思考に終始したのに対し、U児はQ児の気持ちをもう少し考えてモデルを示して見せたところが、思考の違いだったと思われる。



## (2) 幼児の思考を促す教師の援助

Y児の威嚇する様子を注意したり、Q児の思いを代弁してY児の思いを変えたりさせるのではなく、交渉場面を楽しみやすい雰囲気にするのを重視した。Y児のひょうきんな行動も手伝って、Q児やU児もその場を離れず、Y児に抗議するようなことはなかった。思いが食い違ふ時には、いろいろなアイデアを出し合い、それも楽しむような経験になったと思う。

## (3) 今後に向けて

今回は、結局Y児の思いの通り、基地とおうちをつなぐことになった。Y児が最後まで基地での遊びを楽しめたのは、そのためかもしれない。しかし、いつもそういう訳にはいかないだろう。友達とのやりとりで、自分の気持ちと相手の気持ちをもう少し客観的に見られるように、その場での援助が必要である。

この事例では、Q児の姿も気になった。Q児が他者との関係を作り、自分の力で遊べるように支えていきたい。

### 事例4 「絵本は一、読まない」

12月17日(水)

クリスマスのおどいに向けて、4歳児全員での劇の練習が毎日行われていた。M児は、うさぎの役になったが、みんなと一緒に座って待ったり、順番に立ち上がって台詞を言ったりすることは少なかった。本番の1週間ほど前からプレイルームでの練習が始まった時にも、M児は近くに置いてある絵本を読んだり、保育室に戻ろうとしたりしていた。そこで、劇の流れがわかるように、みんなの台詞をメモに書いて見せると興味を持った。そのメモを見ながら相談すると、何回かは最後の台詞を言うことができた。

本番を翌日に控え、みんなは練習を終えて、保育室に戻ったが、M児はまだ絵本を読んで、プレイルームに残っていた。そこで、明日のプレイルームの配置をメモに書き、どこに座るか、何をするか予定を立てることを提案した。

養護教諭 「M児くん、明日はクリスマスのおどいだね。先生と明日の打ち合わせをしようよ。明日になったら、この本棚は片付けて、ここには5歳の使う大きな楽器が並ぶんだよ。後ろには小学生の人とか、お母さん達が来るの。M児くんはどこに座る？」

メモに配置図を書きながら聞いた。

M児 「うーん、N先生(担任)の横」

養護教諭 「わかった。このへんだね」

メモに○を書いた。

M児 「うん。そのへん」

養護教諭 「絵本は読むの？」

M児 「絵本は一、読まない」

養護教諭 「うん。読まなくても大丈夫だよ」

えほんはよまない、とメモに書いた。

M児 「うん」

養護教諭 「じゃあ、劇はどこならできそう？」

M児 「うーん」

養護教諭 「うさぎさんのところはM先生（補助教師）と一緒に出る？」

M児 「出ないよ」

養護教諭 「どうして？」

M児 「いやだから」

養護教諭 「そうなんだ。最後のところは？わかる？」

台詞を書いたメモを指しながら聞いた。

M児 「わかるよ」

養護教諭 「じゃあ、じゃーんって礼するところやる？」

M児 「やるよ。ここもわかるよ」

養護教諭 「そうだね。『メリークリスマス』のところもね」

M児 「ここも、もうわかってるよ」

養護教諭 「あー、そこも言えそうだね」

その時、合奏の練習をするために5歳がたくさんプレイルームに入ってきた。当日の楽器も運ばれてきた。

養護教諭 「明日もこんな楽器があるんだよ」

M児 「わかった」と急に立ち上がり、保育室へ走り出した。

養護教諭 「うん。がんばろうね」



## <M児について>

10月に他園から転入してきた4歳児・男児である。遊びの時間には目的や意欲が感じられるが、集団活動の場面になると保育室から離れることがたびたびあった。特別な行事があり、いつもと予定が変わると、抵抗感を示すこともあった。クリスマスのつどいは簡単な劇をすることになったが、練習開始後3日ほどは、保育室から離れてしまうと様子がわからなくなるので、保育室の一角に絵本の棚で仕切りを作ったところ、その中で絵本を読んで過ごしていた。M児は教師の説明の時にも友達の演技の時にも絵本に目を向けたままで、「一緒にやろう」と誘うと却ってその場から離れていきそうになり、逆効果のようであった。M児は、自分の意志でなく活動をすることになると意欲が減退しやすい。劇の練習への参加は、みんなと同じことは難しいと思われ、担任もその場で雰囲気を感じたり、教師と一緒に部分的に参加したりできたらよいのではないかと考えていた。養護教諭はM教師とともに、なるべく練習の時から援助してきた。

### (1) M児の思考する姿から

他の幼児らが、物語をそれぞれの台詞と演技でつなぎながら楽しんでいる横でも、M児は関心を向けなかった。M児の思考を無理に方向付けするのは、M児にとって苦痛のように思われた。

M児は文字を正確に読むことができ、メモには関心がある。その場で走り書きしたメモでも読めるのである。その得意な面を活かすことで、劇の見通しが持て、どこで何をしようか自分で考えることにつながったと思われる。

### (2) 幼児の思考を促す教師の援助

M児は文字が読めるので、本のように話の流れを文字にしてみると、興味をもち、友達の台詞を意識して聞くようになった。このことから、M児は耳から入る言葉だけでは、全体の理解が難しく意欲を持てなかったのが、視覚的な援助をすることで、関心を高めることがわかった。台詞や「打ち合わせ」のメモは、大事そうに持ち帰り、当日持ってきた姿からも、メモが有効であったことがわかる。

### (3) 今後に向けて

これからも、集団活動を通して学ぶ機会は多くある。その時、M児にとって理解しやすい環境を整え、みんなと一緒にする時に、自分はどうしたらその場に居やすいかという経験を積むことにつなげたい。M児の思考の特性を考慮しながら、社会性の学びを意識して援助していく。

したい遊びの時間に、3歳児S児はB児とプレイルームのうさぎ(うさこ)とかかわってから保育室に戻ってきた。二人は、テラスでジュニアブロックを組み立てて何か作っていた。

S児 「先生、来て。ここはうさこのおうちなんだよ」

養護教諭 「へー。ここ？」

S児 「うん」

養護教諭 「トイレはあるの？」

S児 「あるよ。ここ」

一つのブロックを指さした。

養護教諭 「ごはんを食べるところは？」

B児 「あるよ。この黄色いところ」

黄色のブロックを指した。

養護教諭 「そうなんだー」

B児と話していると、S児は三角形のブロックを二つ運んできて組み合わせて乗せた。すると、ブロックはさらに安定しておもしろい形になった。

S児 「見て見て」

養護教諭 「わあ。そうしたら崩れないねー」

S児 「そうだよ。トントントン」

と言いながら、ソフトブロックでつくったトンカチでジュニアブロックをたたき、大工さんのような仕草を見せた。その後、二人は話しながら何かを取りに行こうとした。二人がブロックの場を離れると、その様子を見ていたO児がすかさずブロックに近づき触った。S児はぱっと振り向き

S児 「O児くん、壊す」

B児に向かって言った。二人は戻ってきてO児に近づいた。

B児 「O児くん、ここは、B児とS児がつくったから、壊さないでね」

O児の背中に手を置いて、顔を覗き込みながら優しく言った。O児は黙ってうなずき、少しブロックから離れた。

S児 「O児くん、壊す。O児くん、壊す」

ブロックの方を向いて、O児の方は向かずに繰り返しつぶやいた。

養護教諭 「O児くんは壊さないよね」

O児の顔を向いて訊く。O児はこくりとうなずいた。

S児 「O児くんが壊すから、トントントン・・・」

O児の方は向かず、養護教諭の方を向いてブロックのトンカチでトントんとたたきながら言った。



S児 「これって固まるよ。トントントン」(たたくと固まるという意味)

S児 「きゃー。もぐもぐもぐ、かみかみかみ・・・」

S児はにこにここと何か歌いだした。その後、O児はその場を去り、S児とB児はブロックを壊したり、シーソーをつくったりとたわむれて遊んだ。

## <S児について>

3歳児・男児である。語彙が乏しいというわけではないが、会話が成り立ちにくい幼児である。気に入ったフレーズが耳に入ると、何度もその言葉を大きな声で繰り返したり、相手の方を向かないで一方的に話したり、質問をしてきても答えを聞く前にいなくなったりすることもある。事実は上手に話す、感情を示す言葉が少ない。入園当初と比較するとコミュニケーションはとれてきているが、まだまだ気になる幼児である。

### (1) S児の思考する姿から

S児は、自分の思いをもって、組み立てたりつくり出したりすることが多い。その感覚は独創的でおもしろい。この事例のブロックの組み立て方も初めは三角形2つが横並びだった間に2つの三角形を組み立てて頑丈でユニークな形に作り替えた。O児は、その形のおもしろさに惹かれて触りたくなったのだと思う。



S児は、ブロックを触りに来たO児に対しては「壊す」という認識しかなかった。これまでにO児がブロックで組み立てたものを壊した記憶があったからかもしれない。O児への対応は、S児とB児とは全く違っていた。O児の気持ちも意識して、優しく頼むように話したB児に対して、S児は顔を見ることもなく、壊すと思えば、話を聞く姿勢はまるで見られなかった。そのうち、歌を思いつき歌ったり、結局はブロックも二人で壊してシーソーにつくり替えたりして、その場その場を楽しんでいるようだった。思考は細切れになっている印象を受ける。

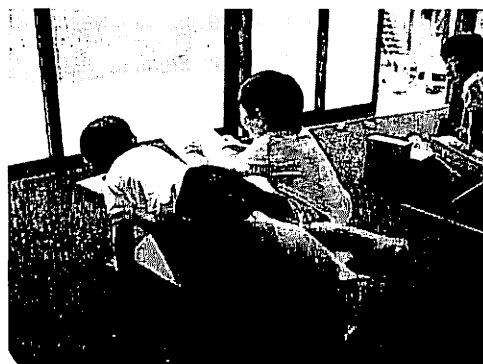
その反面、うさこのおうちをつくり養護教諭に伝えたのは、この事例の直前に本物のうさこのゲージを(大工さんのように)二人でソフトブロックでたたいていたところを、養護教諭に注意されたという経緯があったからかもしれない。思考の伏線は持っているのではないだろうか。

## (2) 幼児の思考を促す教師の援助

S児は、こうだと思ったら、なかなか切り替えることができない。様子を見ていると、S児はO児に対して、攻撃的ではなかった。O児もブロックに固執しているようでなく離れていったので、敢えて間を取り持って感情を伝えることはしなかった。

## (3) 今後に向けて

今後は、もっと物やことにこだわったトラブルも予想される。その時に相手の気持ちを聞いたり、自分の考えを話せたりする場をもてるようにS児の話しやすい環境を探っていく。また、S児のもっているユニークな発想や思考を仲間に伝えて広げ、S児の良さを周囲の友達が認める場を増やしたい。



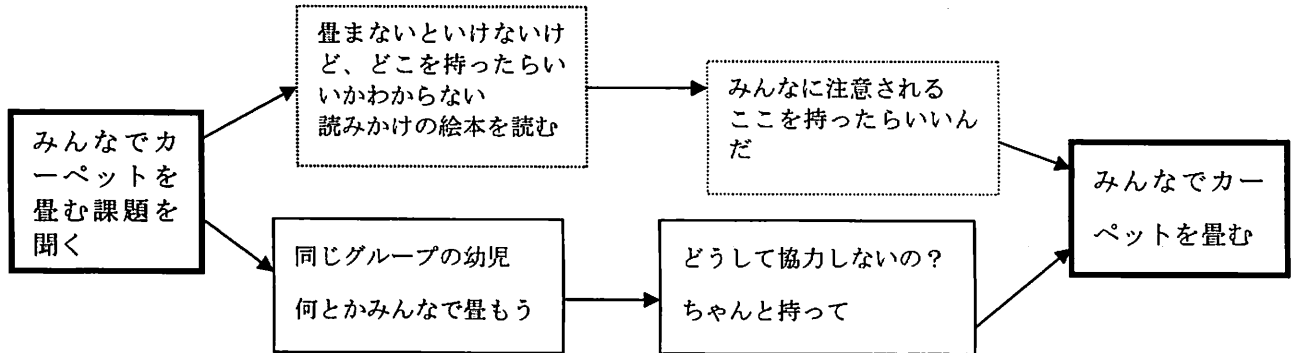
## <1年を振り返って>

### (1) 幼児の思考する姿から

事例から、気になる幼児と周囲の幼児らとの思考の違いを探るために図式化を試みた。教師から見た事例の幼児（確認できた思考）の姿と他児の思考をそれぞれ対比した。

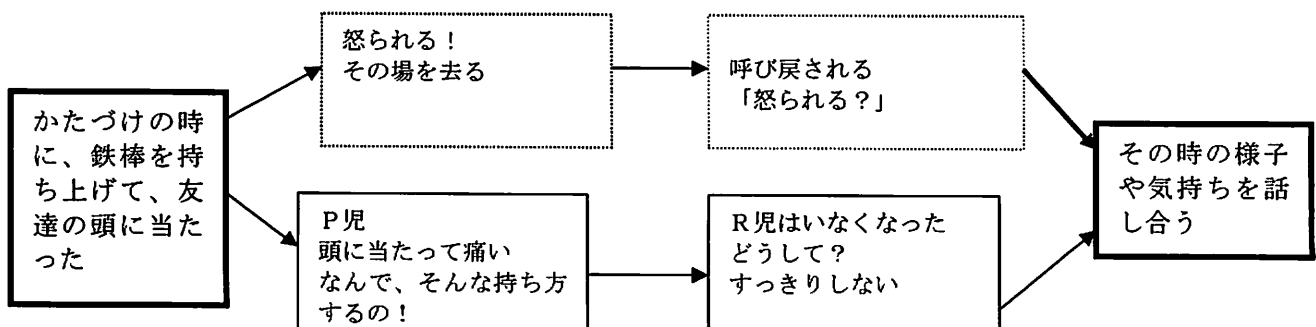
なお、図に示す   は事例の幼児の思考   は周囲（その他）の幼児の思考   は状況  $\rightarrow$  は思考の流れ  $\longrightarrow$  は教師の援助 である。

#### 事例1 5歳児T児 みんなでカーペットを畳む時に、絵本を読んだ



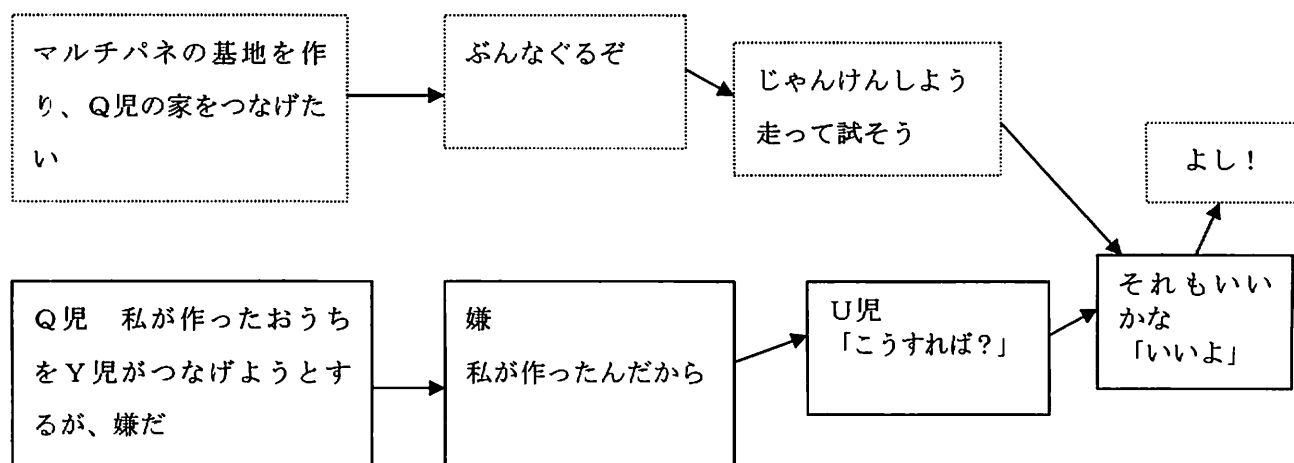
T児はカーペットのどこを持てばよいかわからなくなった時に、読みかけの絵本を読み続けた。その後、友達にどこを持てばよいか示されると、同じ行動ができた。その姿は他の幼児が通常とる姿とは違っていた。みんなでカーペットを畳むという行動の意味の理解が、違っていたのではないだろうか。周囲の幼児らはグループみんなで協力して同じことをするという教師の意図を理解し何とかみんなで畳もうと試行錯誤していた。T児は同じ説明を聞いても「みんなでカーペットを畳む」という指示の理解であり、カーペットを持てなくなった時の思考が絵本を読むという一見突飛な行動になったのではないだろうか。

#### 事例2 4歳児R児 けがをさせ、その場からいなくなり、呼び戻され「怒られる？」と聞いた



R児は自分の行為が困った状況になった時に、その場を離れるという行動をとった。他の幼児にも、そのような思考は働くであろうが、それと同時に相手の様子を見たり、どうしようかとその場に留まって動けなくなったりすることが多い。呼び戻された後のやりとりの中で「その時、どう思ったの？」とR児の気持ちを聞いたことがきっかけで、R児の思考が「怒られる」ことで一杯であったことがわかった。「怒られる」ことと「状況を知ってどうするか考える」ことの違いに気づかないことが、R児の思考を短絡的にしたと思われる。

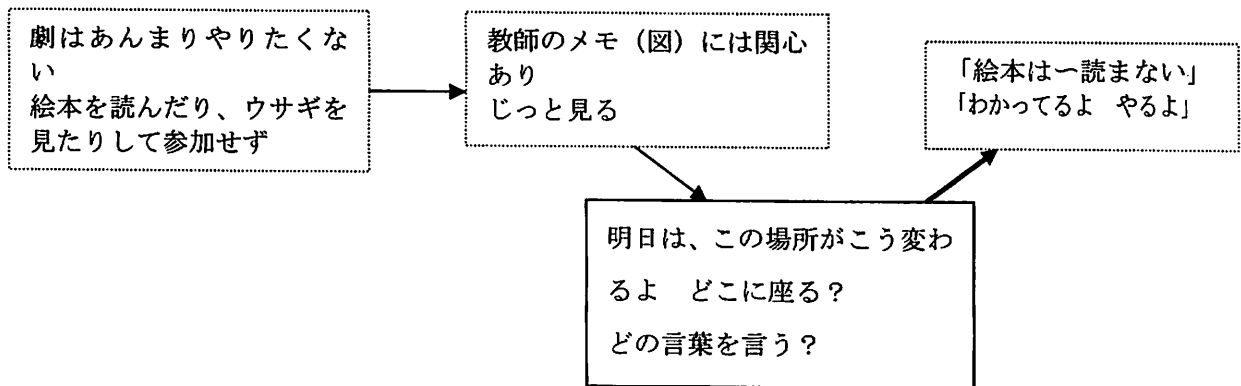
### 事例3 4歳児Y児 自分の基地とおうちをつなげたくて相手の意志を変えようとした



Y児は、Q児に「うん」と言わせなかった。一度、こうだと思ったら、なかなか変更できないY児の特性があるのかもしれない。その方法が一方的な思考で、威嚇したり、ずるをしたりと受け入れられるものではなく、Q児の思考は変化しなかった。思い通りにならない時に他の幼児らにもこのような思考はあるだろうが、Y児は相手の気持ちに共感せずに自分のしたい方法を何度もせわしなく試したため、Q児には通じなかった。この様子を見ていたU児の思考は、こうしたら受け入れられるのでは、という相手意識があり、頑なだったQ児の思考を変えさせた。U児とY児の思考の違いは、意志ある相手と自分という、見えないものの理解の違いによるものと思われる。

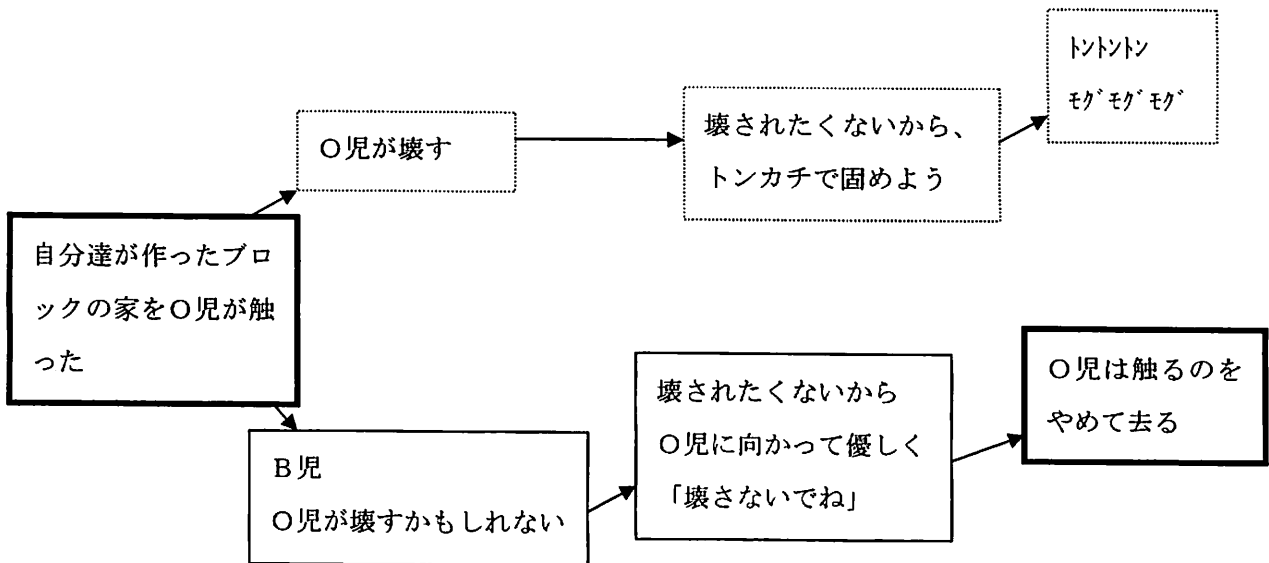


事例4 4歳児M児 劇の練習への参加をメモに示すと予定を立てられた



行事への意欲は幼児によって様々であるが、大抵は経験して楽しさを知ったり、友達の様子を見て、行動を触発されたりすることが多い。しかし、M児は経験してみるという行動をあまりとらない。その理由は活動への関心が低いこともあるだろうが、他の要因として、どこで何をするとどうなるのか、という状況の予想しにくさがあると思われる。それを明確にするのがメモであり、状況の視覚的説明である。見ることで予定を立てられ、自分の行動を前もって決めるという思考が働いた。自分で決めたことは、安心して実行できたのではないだろうか。

事例5 3歳児S児 ブロックを組み立てたものをO児が壊すと何度も言う



S児は、O児の姿を見て「O児がブロックを壊す」と思ったら、他の言葉は耳に入らないようで、O児に向かって攻撃することではなく、ブロックに目が向いていた。事象に対する視野の狭さを感じる。3歳児であってもB児は相手意識があり、壊されないための手段を考えた。S児の言動はO児には理解できないであろう。

何度も同じ言葉を繰り返すS児の言動は、声を出しているうちに違う思考になっているかもしれない。擬音語を発しているとき、次第に似たような擬音語の歌詞が出て、思考が飛躍し、大事なブロックも壊してしまった。

## (2) 幼児の思考を促す教師の援助

思考を促すというよりも、思考の流れや方向性を知ることが、援助の基本になると思われる。教師が受け止めたことを幼児に確認したり、相手の幼児に伝えたりすることで、新たな思考や行動が生まれる。教師はどちらかの思考に偏らず、「違い」をわかりやすくすることが重要である。必要な場面であれば教師が仲介するために、周囲からは見えにくい気になる幼児らの思考と行動を教師がよく観察しておくことが重要である。思考の中に過去の経験が関連していることもあるようなので、複数の教師で情報を共有しておくといだろう。

また、その場ではわかりにくかったことも記録に残して振り返ることで、思考の違いに気づくこともある。長い目で援助をこころがけることも大切である。

## (3) 今後に向けて

事例の幼児らの行動や言葉を細かく見直して図式化してみると、初め「ずれ」と感じていたものが、「違い」に見えてきた。その「違い」は多数との違いであり、「ずれ」や「間違い」ではない。違う部分を無理にどちらかに合わせるのではなく、まず「違い」に気づいて、どうしなければいけないのか、このままでもよいのかを見極めることの方が重要であると思われた。

気になる幼児らの思考の内面は教師にもわからない部分がある。教師の思い込みに陥らないように、気になる幼児の行動をよく見、時には尋ねて確認しながら、援助していきたい。援助の方法は幼児らとともに試行錯誤していけばよいのではないだろうか。それらを記録することで個別の支援計画につながり、複数の教師の連携をはかることもできる。